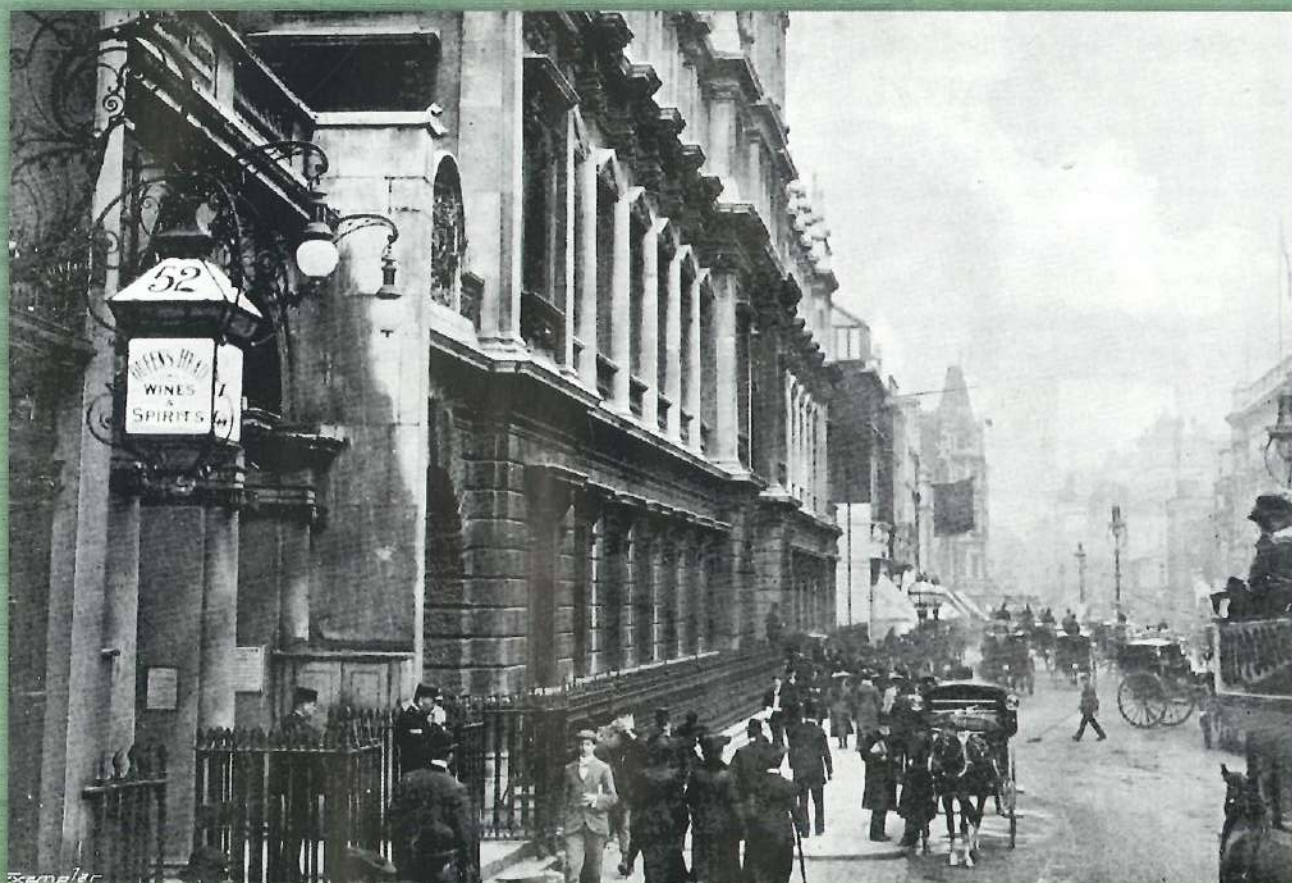


■■■■■■■ Athena Sources in Urban History ■■■■■■■■

MODERN LONDON

1900-1940

モダン ロンドン



Parts 4-6: 1900-1910

世紀転換期からエドワード朝期のロンドン

Part 4 [全4巻] ISBN 978-4-86340-309-3・菊判・c. 1800 pp., ill.

定価 本体 86,000円+税 ▶2019年11月

Part 5 [全4巻] ISBN 978-4-86340-310-9・菊判・c. 1410 pp. (incl. 60 col.), ill.

定価 本体 92,000円+税 ▶2019年11月

Part 6 [全4巻] ISBN 978-4-86340-311-6・菊判・c. 1624 pp. (incl. 18 col.), ill.

定価 本体 88,000円+税 ▶2020年10月刊行予定

Athena Press

エドワード朝ロンドンの 諸相を眺める楽しみ

川端 康雄 ● 日本女子大学教授



イギリスの20世紀初頭はどんな時代だったのだろうか。1837年からつづいたヴィクトリア女王の長い治世が1901年1月22日の女王の死去によって幕を閉じる。女王の長男エドワード(七世)は王位継承時に59歳で、1910年5月に70歳で亡くなり、その息子のジョージ五世が王位を継ぐ。64年におよぶ長期のヴィクトリア女王時代と、第一次世界大戦(1914-18)および「ハイ・モダニズム」の時期をふくむ四半世紀のジョージ五世時代(1910-36)のあいだに扶まって、エドワード朝期は、10年足らずの短期ということもあり、いささか影が薄いという印象を一般に持たれているのではないだろうか。ヴィクトリア朝期が終わっても、20世紀初めは旧時代のモラル、趣味、感受性が根強く残っていて、全面的には新時代の幕開けとはいえない。コナン・ドイルはシャーロック・ホームズものを発表しつづけるし、アーツ・アンド・クラフツ展も3年おきに開催されている。ロンドンの街路には相変わらず馬車が走っていて、「バス」といえば(この時期に自動車が徐々に導入されるとはいえ)前世紀からひきつづき御者が運転する乗合馬車が第一義だった。たとえば1903年生まれのジョージ・オーウェルがそうだが、エドワード朝期に幼少期を送った人びとの多くにとっては、第一次世界大戦をへて大きく変容する以前の、比較的ゆったりとした時代として、ヴィクトリア朝期と地続きの時代として記憶されていたようである。むしろ大戦後の大きな社会変化をもたらす文化的社会的発展のきざしがこの時代にあらわれていたことも確かではある。ヴィクトリアニズムから20世紀モダニズムへの継承と断絶という問題について(以前の研究動向の反動もあって、近年は継承の部分に強調点が置かれているが)考察をさらに深めていくには、エドワード朝期の文化と社会をじっくり吟味するのが肝要だ。

アティエナ・プレスから刊行される「モダンロンドン」の続刊(第4~6部)の「世紀転換期からエドワード朝期のロンドン」はそのための資料として有用である。第4部は20世紀の最初の数年のロンドンの標準的な風俗誌で、マクミラン社の「本通りと路地」叢書のロンドン版、またロンドンのナイトライフを特集した2冊をふくむ。第5部は作家や画家の目をとおしてエドワード朝中期のロンドンを描き出した書物群。そのうち「ロンドンの魂」(1905)は、近年新たに注目を集めている小説「パレーズ・エンド」(1924-28)の作者フォード・マドックス・フォード(旧名フェファール)の若かりし日のロンドン論であり、その一方、アーサー・シモンズの「ロンドン」(1909)は、「象徴主義の文学運動」の著者が1908年に精神疾患で事実上文人としてのキャリアを終える直前の白鳥の歌とも評せる美しい散文である(これはアメリカで刊行された本だが、印刷自体はウィリアム・モリスが使っていたロンドンのチジック・プレスで刷られ、ケルムスコット・プレスの影響が濃厚な本の造りになっている)。「ロンドンのボヘミア」(1907)は、後に「ツバメ号とアマゾン号」シリーズで児童文学作家として広く知られることになるアーサー・ランサムがジャーナリストとして活動し始めた二十歳代の著作である。第6部はエドワード朝後期の風俗を描く一連の書物からなる。そのなかの「バスの天辺からのロンドン」(1906)は、ダブルデッカーの二階席から撮影した写真を多数配してロンドン中心部の名所を紹介した一種のガイドブックであり、当時は多く刷られ消費された本だろうが、いまでは稀少価値が高い。

最後の本がそうだが、写真および挿絵の図版が本文に劣らず資料的価値に富むことも指摘しておかねばならない。「帝国ロンドン」(1901)はハンスリップ・フレッチャーが60点のイラストを供給、「ロンドンの夜の面」(1902)は人気挿絵画家トム・ブラウンが作家ロバート・マクレーとともに夜のロンドン取材スケッチして一緒に本を造っている。ランサムの本はフレッド・テイラーが挿絵を手がけている。そしてイラストという点で特筆すべきは、第5部のW・J・ロフティ著「ロンドンの色彩」(1907)およびアルフレッド・H・ハイアット篇のアンソロジー「ロンドンの魅力」(1907; 1912 ed.)に附された牧野義雄の挿絵である。19世紀末から45年の長きにわたってロンドンに住みロンドンを描き続けた日本人画家(自身Yoshio Markinoと綴った)にとって「ロンドンの色彩」は彼の出世作となるものだった。不遇を託っていた牧野の画才と人物を認め、世に知らしめた貢献者が美術批評家M・H・スピールマンで、自ら牧野との出会いおよびその経歴を詳細に伝える序文を寄せている。最近イギリスで新たに評伝が出されて注目度が上がっている画家の貴重な仕事である。

以上、復刻される書物群からいくつかつづいで紹介してみたが、エドワード朝期の首都ロンドンの諸相を描いたこれらの同時代文献は(少なくとも日本の大学図書館などでは)容易にアクセスできない資料であるだけに、復刻版によってまとまった形でこれらを手にとって見られるのはたいへんありがたい。

20世紀最初の40年間を扱うモダンロンドンシリーズ!

Part 4からPart 6では、

1900年から1910年の間に刊行されたロンドンの生活情景についての著作を構成!

Part 4: 1900-1910 (1)

ISBN 978-4-86340-309-3 • 菊判 • c. 1800 pp., ill. • 全4巻定価 本体86,000+税



Arthur W. À Beckett **London at the End of the Century: A Book of Gossip** (1900)

The Position of the Press • Strangers in London • Religion in London • A Peep into Stageland • Parliament up to Date • A Night in the House • The Premier Club of England • Londoners Holding Holiday • The Development of the Club • In "Rather Mixed" Clubland • In Auxiliary Clubland • A Pantomime at Drury Lane • London Exhibitions • Coaching the University Crew • The Sequel to the Derby • The London Gondola • London on Strike • London Fires • Pall Mall and Private Thomas Atkins • Concerning the London Volunteers • Serving with the London Militia • London Gunners at Shoeburyness • Becoming a Society Lion • Entertaining the Working Man • Choosing a Fancy Dress • Parliamentary Speaking • Art in London • Spending Bank Holiday in London • A Bank Holiday without "Arry" • London Out of Town • Londoners and Their Summer Holidays • Londoners and the Channel • London under Doctor's Orders • Two Cities in Forty-Eight Hours • The Londoner's Search for Health • The Parisian Part of the London District • A Novelty in London Recreations • London Schoolboys at the End of the Century

20世紀を迎える頃の、著者が「現代のバビロン」と表現するロンドンの情景。気軽で奔放な一連の描写で「娯楽を絡めた情報」を載せたもの。著者 À Beckett は様々な分野で数多くの執筆をこなし、風刺雑誌 (*Tomahawk* や特に *Punch*) のほか様々な刊行物に寄稿した。À Beckett 家と *Punch* との長年にわたる関係を記した著作と何冊かの回想録で知られる。

Arthur H. Beavan **Imperial London** (1901)

London in the Past • Royalty and Modern London • Ecclesiastical Buildings in London • Official, Legislative, and Diplomatic London • Legal London • Criminal London • The Seamy Side of London • London and the Shadow of Death • Mercantile London • In the City of London • Gastronomic London • Locomotive London • Utilitarian London • Romantic London • Interesting London Houses • Literary, Artistic, and Scientific London • Philanthropic and Scholastic London • Fashionable and Military London • Theatrical London • Picturesque, Botanical, and Zoological London • Journalistic London • Index

帝国の「心臓」という表現はこの時代によく使われたロンドンの隠喩であったが、まさにそうした「帝都ロンドン」、権力の高みにある「世界の首都」を、より包括的に書き記そうとした著作。作家でジャーナリストの Arthur Henry Beavan による文と、本シリーズ Part 1 に収録タイトルがあるイラストレーター Hanslip Fletcher が描いた情景で構成されている。

Mrs. E. T. Cook **Highways and Byways in London** (1902; 1903 imp.)

Highways and Byways • The River • Rambles in the City • St. Paul's and Its Precincts • The Tower • Southwark, Old and New • The Inns of Court • The East and the West • Westminster • Kensington and Chelsea • Bloomsbury • Theatrical and Foreign London • London Shops and Markets • The Galleries, Museums, and Collections • Historic Houses and Their Tenants • Rus in Urbe • The Ways of Londoners • The Stones of London • Index

20世紀になったばかりのロンドンの、今では古典的と言える内容を広範に扱ったもう一つの著作。マクミラン社の "Highways and Byways" シリーズの一冊で、そのシリーズに多くの建築画を提供した Frederick L. Griggs とロンドンの生活情景のスケッチで有名な Hugh Thomson のイラストに彩られた内容。著者 Emily Constance は、この時代に影響力のあった政治ジャーナリスト Edward Tyas Cook と 1884年に結婚したこと以外はほとんど知られていないが、評判のよかったロンドンのガイドブックも書いている。

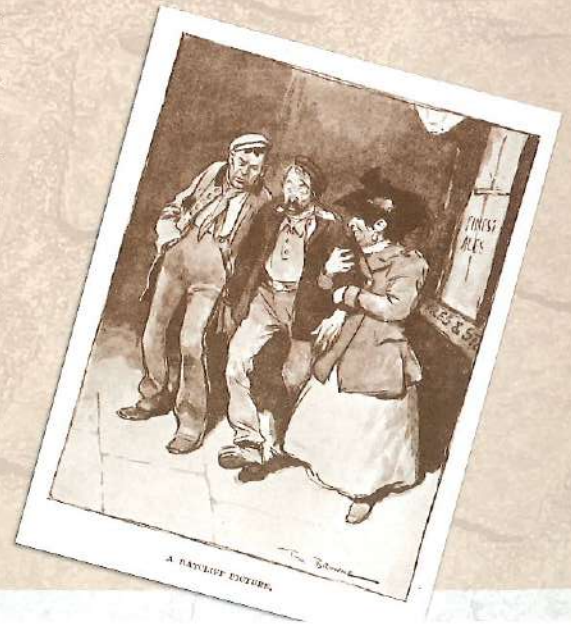
Robert Machray **The Night Side of London** (1902) & George R. Sims **London by Night** (1906) 2-in-1 vol.

[Machray] Piccadilly Circus • In the Streets • "In Society" • Not "in Society" • An East End Music Hall • Earl's Court • The Masked Ball • The Shilling Hop • Club Life • A Saturday Night with the "Savages" • With the "Eccentrics" • "La Vie de Bohème" • Sunday Night at the New Lyric • A "Night Club" • The National Sporting Club • A School for Neophytes • "Wonderland" • New Year's Eve at St. Paul's • The Hoppers' Saturday Night

ロンドンのナイトライフについてのくだけた内容の非公式ガイド。「20世紀の最初の二年間にロンドンの夜に見られた事柄の記録」。内容のほとんどが楽しい事柄だけで、かたや「極悪非道な事柄」は除外されている。著者とイラストレーターがともに視察に出かけ、共同でこの本に仕上げた。Robert Machray は小説家で海外事情ジャーナリスト、Tom Browne は 20世紀転換期に人気のあったイラストレーター。

[Sims] Regent Street and Piccadilly • Charing Cross and the Strand • Oxford Street and Tottenham Court Road • In Shaftesbury Avenue • In Pimlico

現在では貴重な「夜の」ロンドンについての短文集。初版は *Daily Telegraph* で刊行、ロンドンのナイトライフについての暗黒面だけを描き出している。George R. Sims は数多くの劇作、風刺、小説、物語、短編を書き、新聞や雑誌に幅広く寄稿した。今では主に 1880年代の社会ルポルタージュや貧困対策活動、その後の売春や児童虐待に対する活動で知られている。



Part 5: 1900–1910 (2)

ISBN 978-4-86340-310-9 • 菊判 • c. 1410 pp. (incl. 60 col.), ill. • 全4巻定価 本体92,000+税

Ford Madox Hueffer *The Soul of London: A Survey of a Modern City* (1905) & Arthur Symons *London: A Book of Aspects* (1909) 2-in-1 vol.

[Hueffer] From a Distance • Roads into London • Work in London • London at Leisure • Rest in London

[Symons] ———

ロンドンをモダニズム的に描いた初期の作品を合本。

一つ目の著者 Hueffer はイギリス文学史の重要人物の一人、のちの Ford Madox Ford。'08年「イングリッシュ・レビュー」、'24年パリで「トランス・アトランティック・レビュー」を創刊、精力的にハーディ、T.S. エリオット、ジョイス、ヘミングウェイ等の作品を掲載した。小説家として「善良な軍人」(15年)、四部作「パレーズ・エンド」(24~28年)等がある。タイトルの通り「ロンドンの魂」を捉えようとしたもので、この中で著者は「現代ロンドンが醸し出す雰囲気を探ろうとしている」。

二つ目の著者は文芸評論家で詩人の Arthur Symons。1908年に精神疾患を発症した翌年の刊行。本来、文章にアメリカの写真家 Alvin Langdon Coburn の写真を加える企画だったが二人はイギリスで出版を引き受けてくれるところを見つけられず、Coburn の友人でアメリカの書籍商 Richard Brooks が文章のみの状態で自費出版で請け負った。Bénédictte Coste の論文 (*Polysèmes* 15 (2016)) で執筆時期は 1906 年から 1907 年とされるが、部分的にはそれより早い時期に書かれている。

Arthur Ransome *Bohemia in London* (1907)

An Arrival in Bohemia • Old and New Chelsea • A Chelsea Evening • In the Studios • The Country in Bohemia • Old and New Soho • Coffee Houses About Soho • The Book Shops of Bohemia • Old and New Fleet Street • Some Newspapers and Magazines • Ways and Means • Talking, Drinking and Smoking • Old and New Hampstead • A Wedding in Bohemia • A Novelist • A Painter • A Gypsy Poet

本書はロンドンの中の自由奔放な暮らしが見られる、画家や作家、風変わりな人々が集うエリアの様子を書き記している。主にチェルシー、ソーホー、チャリングクロス、フリート街、ハムステッドに焦点を当て、モダニズム初期の社会の姿を我々に想起させる。画家のスタジオとモデルたち、ソーホーのバーやレストラン、フリート街の出版業界、「語り、飲み、煙草を燻らす」古くからの場所…。著者 Arthur Ransome はジャーナリストで、のちに児童文学「ツバメ号とアマゾン号」シリーズを執筆して第 1 回カーネギー賞を受賞。本書の挿絵は当時のポスター画家 Fred Taylor によるもの。

W. J. Loftie *The Colour of London: Historic, Personal, and Local* (1907)

Introduction (M. H. Spielmann) • An Essay by the Artist (Yoshio Markino) • Of the Colour of London • Of the Boundaries • Of London Names • Of the Migrations of Fashion • Of the Tower of London • Of Changes of Custom • Of the Parks • Of the London Records • Of London Manors • Of the Lord Mayor • Index

著名なロンドンの歴史研究家 William John Loftie がロンドン特有の気風について説明するもので、更に長年ロンドンに居住した日本人画家牧野義雄による挿画 60 点が使われている。牧野は、1897 年から 1942 年までの間ロンドンに居住、Arthur Ransome, Douglas Sladen や M. P. Shiel といった人々と親交を結んだ人物。本書は 1907 年に Chatto & Windus 社から刊行、芸術評論家 M. H. Spielmann による本書の牧野作品についての序文と、牧野本人による文章が含まれる。牧野は Ransome の *Bohemia in London* にも登場するようである。

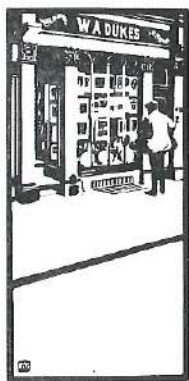
Alfred H. Hyatt, comp. *The Charm of London: An Anthology* (1907; 1912 ed.)

The Londoner's Farewell • The Londoner Returns • The London Streets • The East End • The West End • Some London Phases • The Seasons in London • River, Bridge, and Tower • A Few London Memories • The Praise of London • The Play's the Thing! • Rus in Urbe • The Fringe of the Town

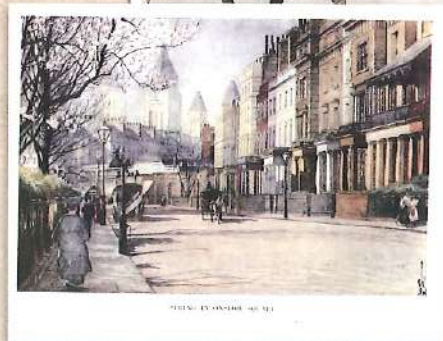
Chatto & Windus 社は前出と同年、ロンドンの世界を対象にした簡潔な詩と散文のアンソロジーを刊行、「特に現代のロンドンを表現する」ようなセクションがされている。1907 年の初版にはイラストがなく、本復刻では牧野による別の 12 枚の水彩画が掲載された 1912 年刊行の第二版を用いた。Alfred H. Hyatt は 20 世紀初頭に専門職としての編集業務を生業とした人物。

BOOK-SHOPS OF BOHEMIA 141

reviewing began, thinking it unfair to their writers thus to place books they had sent for nothing to the papers at once upon the second-hand stalls. But presently, as a Christmas season came on, and children's books and sensational novels poured in in their dozens and their twenties, the pile in the corner of my room grew beyond all bearing, for I would not insult the books that had been purchased in their own right by giving them these foundling newcomers as neighbours on the shelves. I was driven to reasoning again, and soon proved, with admirable comfortable logic, that an advertisement, or a piece of good advice, from so able a pen as my own must be worth more to an author than the chance sale of a copy on the stalls. I sent immediately



OLD AND NEW CHELSEA 39
front of the house, and visitors are allowed to
nose about inside. But it is better to forget
on a summer's day, and to
think only of the old poet-
philosopher who was so
loved so well the river that
flows stately, and
the street. There, looking out
you may see his statue, the
patron saint of so many wit-
tally bad-tempered fellows,
who cannot, as he could, vin-
dicate their bad temper by their
genius.
The river made Chelsea the
place it is, a place different
specially from every other
sidings of the town. Mr. G.
K. Chesterton says he loves
Battersea, "because it is the
only suburb that re-
sists a local patriot."
Chelsea has
a local patriot
so, but of another
of the patriotism
members of a
legion. Chelsea
does not breed



Part 6: 1900-1910 (3)

ISBN 978-4-86340-311-6 • 菊判 • c. 1624 pp. (incl. 18 col.), ill. • 全4巻定価 本体88,000+税

E. V. Lucas **A Wanderer in London** (1906) & A. St John Adcock **London from the Top of a Bus** (1906) 2-in-1 vol.

[Lucas] No. 1 London and Piccadilly • Romance and the Wallace Pictures • Mayfair and the Georgians • St. James's and Piccadilly East • Leicester Square and the Halls • Trafalgar Square and Great Englishmen • The National Gallery and Italian Masters • The National Gallery and Northern Painters • The Strand and Covent Garden • Fleet Street and the Law • St. Paul's and the Charterhouse • Cheapside and the City Churches • The Tower and the Amphibians • Whitechapel and the Boro' • Holborn and Bloomsbury • The British Museum and Soho • The Parks and the Zoo • Kensington and the Museums • Chelsea and the River • Westminster and Whitehall • Index

読者をエドワード朝期のロンドンを巡る散歩にいなう内容。始まりはウェリントン公爵家のタウンハウスで「ロンドン一番地」と呼ばれる、ピカデリーのアズプリー・ハウス。著者 Edward Verrall Lucas は長期に渡って *Punch* や他の雑誌の発行人に加わっていたと同時に、本書のようなガイド書や旅行書をはじめ、あらゆるジャンルで非常に多くの本を書いた。またメシュエン社でリーダーとして勤務、後に社長となる。本書はそのメシュエン社の「Wanderer」シリーズの中で非常によく売れ、1931年までに28版を数えた。アーツ・アンド・クラフツ運動の画家 Nelson Dawson による16枚のカラー図版を備える。

[Adcock] From Paddington to Holborn Circus • From Holborn Circus to Liverpool Street • From Liverpool Street to Tooley Street • From Tooley Street to Cannon Street • From Cannon Street to Charing Cross • From Charing Cross to Victoria • From Victoria to Paddington

ロンドン中心街を巡るバスから見られる情景を収録した希少なブックレット。イギリスの風景写真家 Henry Irving が「移動するバスの屋根から写した」合計47枚の写真が、7つのバス路線ごとの章に構成されている。文はロンドンについて様々な本を書いている Arthur St John Adcock。本シリーズ Part 2 の *Wonderful London* (1926-27) の編集者で、また弊社刊「Slum Fiction」所収の *East End Idylls* (1897) の著者。

Clarence Rook **London Side-Lights** (1908)

West to East • Love Lane • The London Crowd • The Boxers • The Omnibus • Constables • London Justice • Unlicensed Premises • Visiting Day • Cave-Dwellers • Morality and the Cabman • The Fielders • Genius Loci • The Right Time • A Day's Work in Fleet Street • The Mechanical Side • Called to the Bar • The London Hotel • To Him Who Waits • Animals and Doctors • Mother of Parliaments • The Pirate of Piccadilly • Fifty Years Ago • The Bath of Silence • A London Woman's Problem • Disturbers of Traffic • "Old 'Erb" • "Anky-Panky-Anner" • A Stake in Piccadilly

ロンドンの気風とロンドン庶民の世界を捉えようとした内容。著者 Clarence Rook はジャーナリスト、作家で、コックニー小説——ロンドンの労働者階級についての小説で、その多くはイーストエンドが舞台になっている——の代表作の一つである、弊社刊「Slum Fiction」所収の *The Hooligan Nights* (1899) の著者として有名。

Ralph Nevill and Charles Edward Jerningham (Marmaduke) **Piccadilly to Pall Mall: Manners, Morals, and Man** (1908)

Topics include: high society, restaurants, music halls and burlesques, morality, the turf, club life, museums, statues, architecture, etc.

先の *London Side-Lights* と対称的に、メイフェア、セントジェームズ、ピカデリー、ザ・マルといったロンドン中心部の最上流の社会について書いたもの。著者は二人とも、個人教育を受けレジャーやクラブを楽しむエリートの上流階級の中に生まれ育ち、従ってそれらが変化していく様子を語るにはうってつけと言える。Nevill は Lady Dorothy Nevill の息子で、外交に携わりつつ、ライターとして上流階級についての本を書いた。Jerningham も著名な一家の出身で、数多くのクラブに出入りしていた典型的なクラブ通い。また Marmaduke の筆名で軽い噂話などを載せる雑誌の社交欄の記事を長く提供していた。

James Douglas **Adventures in London** (1909)

Mist • Holidays • Dancing • Eating • Mimes • The River • Politics • Poverty • Children • Law • Eld • Sport • Everything

本復刻対象期間の終わりにあつたロンドンものの中で代表的な著作をもう一つ。ロンドンの天気、演劇界、スポーツなどあらゆる分野を取り込んだ内容。著者 James Douglas は長きにわたって活動したジャーナリストで、晩年は *The Star* や *Sunday Express* の編集長となったが、卑猥な小説に対する反対運動で知られる。Radclyffe Hall の小説 *The Well of Loneliness* への攻撃は有名。



ST CLEMENTS CHURCH, STRAND



SLEEPING, FROM LONDON BRIDGE



ST PAULS FROM FLEET STREET

【今回の構成について】

今回のPart 4からPart 6は、ほぼエドワード朝に重なる時期に出版された著作で構成しました。20世紀初めのロンドンについて書かれている本ですが、これらの多くで著者の生年が1840年代から1860年代であることもあって、ロンドンの古い逸話とともに、「昔はこうだった」というような個人的な追憶を振り返る場面も多々あり、19世紀末の生活を振り返ってみることもできる内容です。

著者の多くは、都市が大きくなりすぎ、その生活様式も、一人の書き手、または単一のストーリーでは扱いきれないほどあまりにも複雑になってしまった、と指摘します。しかしながらここに集めた著作はすべて、自身が暮らす都市と時代の独特の「気風」を示そうとしたもので、新しい時代への変化の始まりの時の具体的な情報は現代の研究者にとってあらゆる点で興味深いものとなるでしょう。



● シリーズ既刊

Athena Sources in Urban History

MODERN LONDON, 1900-1940

Part 1-3: 変貌する大都市ロンドン

Part 1 [全4巻] ISBN 978-4-86340-283-6 • B5判 • c. 1250 pp. (incl. 107 col.), ill.

定価 本体 95,000円+税

Philip Norman *London Vanished and Vanishing* (1905)

Hanslip Fletcher, ed. *London Passed and Passing: A Pictorial Record of Destroyed and Threatened Buildings* (1908)

Malcolm C. Salaman *London Past and Present* (1916) & E. Beresford Chancellor *Disappearing London* (1927) 2-in-1 vol.

E. Beresford Chancellor *Lost London: Being a Description of Landmarks Which Have Disappeared* (1926)

Part 2 [全3巻] ISBN 978-4-86340-284-3 • A4判 • c. 1200 pp. (incl. 3 col.), ill.

定価 本体 92,000円+税

Arthur St. John Adcock, ed. *Wonderful London: The World's Greatest City* (1926-27) 3 vols

Part 3 [全3巻] ISBN 978-4-86340-285-0 • 菊判 • c. 1620 pp., ill.

定価 本体 66,000円+税

Harold P. Clunn *London Rebuilt, 1897-1927* (1927)

Harold P. Clunn *The Face of London: The Record of a Century's Changes and Development* (7th ed., 1937)

Harold P. Clunn *London Marches On* (1947)

【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】